意志持ちて神すら穿つ

ヘルメスの鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
意志持ちて神すら穿つ

【Ｎコード】
Ｎ０５８３ＢＡ

【作者名】
ヘルメスの鳥

【あらすじ】
西暦２０２０年、世界は人の手から離れドラゴンの物となった。
蹂躙され、駆逐され、人々は明日の命すら確定的ではなくなった。
彼らの希望は特務機関ムラクモに任された、はずだったのだが……？

ＦＲＥＥを信条に、世界中のギアを壊して回る背徳の炎。
ギアによって愛の在り方に気付かされた伊達男。
二人の存在は小さな、しかし確かな変化を物語にもたらす。

「あァ？　ドラゴン？　んな事、知るか」
「それよりレディーは、一体どこにいるんだぁ？　まだ見ぬベェイビーが俺を呼んでるぜ！」

Ｎの余裕／引きずり込まれた異邦者（前書き）

新年あけましておめでとうございます。
去年は怒涛の勢いで、様々な出来事がありました。今年は静かな一年になるといいですね。

では注意書きです。
セブンスドラゴン２０２０は、作者自身が、既にレベルカンストしており基本シナリオに沿って進んでいく予定です。ですから未プレイの方はご自分と相談の上で、読み進めるかどうかご判断ください。

ギルティギア（以降ＧＧ）に関しましては、あの二人を原作に介入させます。時代が違う事は僕自身も理解しております。ですから違和感無いように頑張ります。

またＧＧの用語に関しましては内容で触れていく予定です。それでも理解できない方は感想ないしメッセージでお願いします。ただ物語の核心に触れるような質問に関しましては明確に回答いたしかねます。ご了承ください。
僕の説明が拙く、あまりにも理解できない旨のご意見が多い場合は、用語だけの話を作成いたします。

それではお楽しみください。

Nの余裕／引きずり込まれた異邦者

青々とした惑星を背景に金の光体はただ悠然と、静謐に包まれた空間を漂っていた。近くを通ろうとする小星を見る事に彼は飽きていた。その赤すぎる瞳には冷え冷えとした色しか浮かばない。

強力な力を内包した竜と、数多の竜が地上を占領してからどれぐらい経っただろうか。時間の概念という物が存在しない彼の中では、時は永遠か刹那の二つのみ。

その間、どれぐらいが永遠でどれぐらいが刹那か。明確な境界という線引きは、彼の中には無い。感覚的に計っているだけだ。

――後、幾程待テバ、コノ星ヲ食ス事、叶ウノダロウカ……？

星の核を喰らう事で、彼は永遠にも近い時を生きる事ができる。だが竜としての生命力を以てしても、この静かすぎる暗闇を生きるには足りない。

莫大な動力をもたらす星を喰う。はたしてそれに気付いてからどれほどの時間が経ったのか……。いや、今更この話には戻るまい。

目を閉じて力を抜く。それだけで彼の意識は星中に散らばった帝竜の意識に溶け込む。

例えば叫喚。以前見た石造りの建築物とは大きく異なる、巨大な建物。その一つの屋上に陣取り、動く者を視界に入れて牙を剥く。

例えば零蒼。氷に閉ざされた世界で羽を休め、いずれ動くその時に備えている。恐らく力が溜まりきっていないのだろう。外から聴こえる音は、辺りを風雪で遮断しているのか。

例えば音速。止まることなく雲中を駆け抜け、背後に迫る鉄の飛行隊と戦闘を繰り広げている。だが竜の敵であるかと言えば、その後の爆音と散らばる鉄片が否定を告げる。

――首尾ハ上々。アマリニモ簡単スギテ、ツマラナイグライダ……。

しかし竜と言えど、思考を持つならば幾らかの感情も持ち合わせている。そして感情というのは、えてして魔を差し込ませる原因になる事がある。彼も例外ではない。

前にこの星に来た時、この瑞々しい星を口にする事は出来なかった。種を蒔き、根付いたニンゲンという種族はこの星を喰らう邪魔をする。

喰われるのを拒絶するのは理解できなくもない。だが喰われる方が悪い。喰われるような美しい母星を持つ方が悪い。ニンゲンを超えた種族が喰らう、その行為を邪魔する彼奴等が悪い。

結論。自分で蒔いたニンゲンは全て滅ぼさなくてはならない。しかしただ滅ぼすのでは詰まらない。希望という希望を持たせ、極限まで上げてから地の底まで叩き落とす。

自分の食事を邪魔する輩は許さない。それが例え、以前の星の喰い残しであろうと。

――ナラバ、奴等ニハ希望ヲ持タセナクテナハナルマイ。

自分の体内に存在する力、そして宇宙に散らばる無限のエネルギーの残滓を体内に集める。収束するエネルギーは星の表面を容易く捲れるほど。

瞬間的に口内にソレを溜め、一気に吐き出す。視界に捉えるのは、常人には見る事もできない境界。様々な情報が膨大なうねりを伴って形なき動きを繰り出す、この世の全ての理になるべき情報の海。そこを超えた先に、仮定の世界は存在する。

砲口はしかと狙いを定め、勢いよく迸る光の奔流。空気が無いため音は存在しない無の空間。存在を強調する激流は地表に向けて走る。

だが地表にして千メートル付近だろうか。そこで何かに阻まれるように止まり、即座にそこにあった境とぶつかり合う。世界の理を維持しようとする修正力と理を捻じ曲げようとする力が反発する。だが今回ばかりは、理を超える理の力が勝った。

しかし、やはり世界の修正というのは膨大な意志なき力を有している。彼の力を以てしても、数十秒の孔(あな)しかできなかった。

それで十分。それだけで向こうの世界と繋がった。そして近くにいるであろう何者かを、この世界に引きずり込むだろう。誰とも分らぬ者にこの世界の希望を担わせ、同時に絶望を味わってもらおう。

――ワレハマタ目ヲ瞑ロウ。再ビ覚醒シタソノ時、我ガ眼ニ映ルハ果タシテ何ダロウカ……。

再び目を閉じた光体は羽ばたく事なく、ただ暗闇をたゆたうだけだった。

竜に支配されてから二週間。その日、地球の各地において昼夜を問わないオーロラが発生した。今や竜に支配された紺碧、宵闇の空を無視する光彩は、見る者に不吉な想像を掻き立てるには十分すぎた。

そんな空を見上げながら、蒼の女性は不安げに隣に佇む青年の裾を掴む。青年も理解せずに納得した。これは一波乱あるかもしれないと。

蒼の少女とはまた遠く離れた地において、紅の女性は憎々しげに窓から映る光のカーテンを睨んでいた。米国大統領ジャック・ミューラーの所にも、原因不明のオーロラについての報告が入った。

――何を企んでいる、ニアラ……。

空よりもはるか上、宇宙にいるであろう神に向けてエメルは険しい目を向ける。かつての喰い荒らされた時にも、このような現象は無かった。ただ発生しなかったというわけではない。
これは間違いなく油断、慢心といった部類故の遊び。勝利が決まった試合をよりドラマチックにするための配慮――

「クソがっ……！」

思わず近くの壁を殴る。思念体が象る女性の姿では、怒りを満たす破壊ですら存分にはできない。それが今ばかりはもどかしい。
蒼い少女は愛が、そして彼女自身は竜に対する憎しみが表面化しやすい。だがこの身を苛む怒りの大炎。はたしてそれは、ただの憎しみなのだろうか。

彼女に解るのは、これから人類は不利になっていくであろう事だけだった。

「珍しいねぇ、お前さんが俺の船に来るなんて。一体どういう風の吹きまわしだぃ？」
「あァ？　テメェに用があって来た訳じゃねェよ」
「そ～んなに睨むなよ。アンタに睨まれるぐらいなら、むしろマブい姐ちゃんに睨まれたいもんだぜ」

雲の僅かばかり下を飛ぶ飛行船、メイシップ。その甲板の上で、

二人の男が語らっている。
一人は全体的に赤が目立つ長身の男。鍛え上げられた双腕を組み、縁に背を向けて不機嫌そうに眉をしかめている。腰に添えられた両刃の大剣が物騒な光を放ち、茶色の髪が風に流れる。
その隣で同じく大柄の男が縁に腕を置き、帽子に隠されたサングラス越しに下界を見下ろしている。先ほどから不思議な抑揚で話す彼の隣にも、同じく刀が置かれている。といっても隣の男と比べると幾分見劣りする大きさ。加えて彼の武器は男の大剣よりも細い。とても武器としては使えないような代物だ。
マブいなどと今時使われないような言葉を平然と使う男に、上空の寒さとは違った寒さを感じながら茶髪の男は低い声で呟くように口を開く。

「……嬢ちゃんは元気にやってるか？」
「……なるほど、親心ってやつ、ジョークだから睨みなさんな」
「イチイチ茶化すんじゃねぇ。めんどくせェ……」
「は～、やれやれ。洒落の分らない男はレディに逃げられるぜ？」

テメェみたいにヘラヘラする質じゃねえと一蹴し、男はおもむろに顔を上げる。
目線の先では二人の少女が洗濯物を干していた。頭に不釣り合いな大きさの海賊帽を被った少女と、少し背の高い少女。見様によっては姉妹に見えなくもない。しかし背の高い少女は、普通の容姿と言うには随分とかけ離れたものを持っていた。
まず尻尾がある。可愛らしさを演出するようにリボンが結わえてあるが、まちがいなく人には無い物だ。背中から生える羽もまた、彼女がただの人間ではない事を雄弁に語っている。
話にも上がった件の少女は、嬉しそうに白いシャツなどを物干し竿に干していく。彼らがいる場所よりも高い位置であるため、風がこの場所よりも強く流れ、頭に巻いたバンダナや漏れ出でる髪を撫

でる。
ディズィー。この世界に存在するギアと呼ばれる生命体と人間のハーフである彼女は、つい先日まで禁断の森と呼ばれる場所に隠れていた。数々の紆余曲折を経て、今はジェリーフィッシュ快賊団に所属する事になったが、その過程でディズィーは茶髪の男とも出会っていた。
かく言う茶髪の男も、ある人物によってギアとなってから、早や百五十年以上といったところか。ギアに貶められた事によって、男はそれまでの地位などを全て捨て身を隠した。
そして誓った。こんな目に合せた男を必ず見つけ出す。その過程でギアを一つ残らず叩き潰すと。
不屈の信念は、ギア最強と謳われ人類相手に戦争を起こしたジャスティスをも破壊するに到った。ちなみにこの時代において、潜在的に気を扱う素質を持つ日本人を危険視したジャスティスによって、日本は真っ先に島ごと消されたため存在しない。
それほどまでに圧倒的な戦力を持つ人類共通の最大難敵、それが彼の生命体だった。

しかし事ここに来て、男はディズィーという異例に遭遇した。
彼女はハーフでありながら、他人に危害を加えない穏やかな生活がしたいと言う。だが彼女の元となったギアは、破壊神とまで言わせしめたジャスティスである。
いくら理性でコントロールできようと、いつかは本能に負けて襲いかかるだろう。だから男は破壊しようとした。
だが、居合わせた帽子の男は人間らしく生きたいのなら自分の所に来るべきと言った。仮に本能を抑えられなくなっても、自分が強制的に抑え込むと。
しばしの葛藤と煩悶の末、茶髪の男はその場を去った。そして今、再び帽子の男の元に訪れた。

「アレ以降、ディズィーのギアの部分は大人しくなったもんさ。毎朝、目覚ましがてら軽ーく手合わせしてるが、随分自分の力を扱えてるみたいだが」
「ギアの本能なんてモンは、抑えようとして簡単に抑えられるモンじゃねえ。気を抜けば、テメェが見るのは首から上を無くしたテメェ自身かもな」
「お～、怖い怖い。なら、なおさら俺が頑張らなくちゃぁね」

脅すように言うも、やはり男は意に関した様子もなく飄々と受け応える。
彼の胸中を読み取ろうにも、サングラスに邪魔されて本心は窺えない。もちろん茶髪の男には、帽子の男の胸中を読み取ろうなどという考えは微塵も無い。

「テメェ、あんま気ィ抜いてると――」
「ジョニー！　あんまり話し込んでると今日のお昼ご飯抜きだよー！　働かざる者、食うべからずってよく言うでしょー！」
「お、おい、待てって！　今行くから飯抜きは勘弁だっ！　そういう訳だ、ソル。この話はここで終わりな」

茶髪の男の話を遮って頭上から降る声。船体が空を切る音にも負けない大声で、ディズィーの傍にいる少女が言う。
慌てたのは帽子の男、もといジョニーだ。いそいそと床に置いていた刀を手に取ると、コートを翻して船内へと足を向ける。

「オイ待ちやがれ。まだ話は――！」

ソルと呼ばれた茶髪の男も、不機嫌な表情のままジョニーの後を追おうとする。が、それはできなかった。
突如ソル達のいる船体側に暗い孔が開いた。まさに暗いとしか形

容できないソレは、中身が全く見えない。しかも強烈な吸い込みでメイシップを呑み込もうとする。
途端にその場は緊迫した空気を纏う。船内に戻ろうとしたジョニーもソルの隣に立ち、目の窺えない顔で孔を見つめる。表情は珍しく険しい。

「バックヤードを貫通してコッチに干渉しているのか！」
「ソル。アレはどれぐらいデンジャラスなのか、教えてもらおうか～？」

ソルの口調が普段よりもさらに荒くなる。しかし今はそんな事を気にしている余裕は無い。ぶっきらぼうな荒くれ者の雰囲気を纏ってはいるが、元々は科学者であったソルの理解は早かった。
瞬時に状況をある程度把握するが、ジョニーには何が何だかわからない。ただ危険な匂いだけは感覚的に察し、普段と変わらない口調で彼に尋ねる。

「情報の海みたいな不確定粒子の影響を、ほとんど受けないで干渉してきてるって時点で、なんとなくはヤバさが理解できるか？」
「んー、とんでもなくシリアスな匂いがするって事は解った。で、どうすれば良いんだ？」

ジョニーの問いに少しばかり口をつぐむ。恐らくこれほどの孔を開けようと、しばらくすれば自然に塞がるだろう。
だがそれでは船が世界の外側とでも言うべき世界、つまりバックヤードに呑み込まれてしまうだろう。圧倒的に間に合わない。
少ない時間での僅かな思考。その果てに出された結論は、実にソルらしい大雑把な解答だった。

「……大出力の法力で、上書きするように蓋をする」

「するとそれができるのはお前さんと……」

そこでジョニーが見上げると、未だにディズィー達は突然の事態に動けずにいた。

ジョニーが見上げた理由は単純明快。すなわち潜在的に強力な力を秘めた彼女も、ソルの考えを遂行できる人材だった。

その考えに、今度はジョニーが眉をしかめた。せっかく船員と仲良くなったのに、ここに来てそのような事態に巻き込みたくはないという、彼なりの優しさ故。

しかし彼の考えを否定するように、ソルが腰の大剣に手をかける。

「ここで不安定な嬢ちゃんを行かせるよりは、俺が言った方が早ェだろ。アレは俺がやる」

言うが早くソルは躊躇いなく縁まで走ると、思い切り踏切り宙を舞う。束の間の浮遊。そして急激に吸い込まれる。

大剣、封炎剣を媒介にして火の法力を両手に宿す。人間が使える法力の限界を容易く超えた許容量を持つ、彼のみができる大技。自分が呑み込まれる限界の距離で、宙に開いた孔に蓋をする。

目算で距離を測る。一定のラインを超える事で物体が向こう側に転移されているらしく、近付けど中身は果てしなく見えない。だが、ここまで近付けば彼には十分すぎた。

両手に宿した炎を一つに合わせ、封炎剣を銃口にして打ち出す。技の名前を――

「タイランレイ――ぐっ！」

後は勢い良く放出するだけ。その段階に至って、後ろから衝撃が走る。何かがぶつかってきたのだろう。

後ろを向くと見慣れた帽子とサングラスがあった。なんと船にい

るはずのジョニーが、何故かソルの後ろにいた。

「すまないねぇ。メイが飛ばされかけたから、跳んで縁を掴ませたまでは良かったんだが……」

「だからってテメェが飛ばされてちゃ意味ねェだろうが！！　くそっ、俺の攻撃だけじゃ間にあわねえぞ！」

「その点は問題ナッシングって事で」

「あァ？」

吸い込まれて攻撃したのでは、蓋が小さすぎて船が呑み込まれる。そう危惧したソルに対して、空中で胡坐をかいたジョニーが指を振る。余裕たっぷりにチッチッチとおちょくる仕草は、こんな状況でもソルに怒りを覚えさせた。

必然的に語尾が荒くなるソルに向けて、ジョニーは口の端を僅かに上げた。

「もし俺が呑み込まれたらぁ、悪いけどディズィーにキツーイ一撃を入れるように言っておいた。今頃、もうやってるんじゃぁないのかねぇ？」

本当はあの娘は巻き込みたくなかったんだけどねぇ。

ちょうど彼が言い終わった時、ソルの視界に極太の光線が迫っている事が見て取れた。先程構えていた一撃を自分たち側から見たら、こんな感じなのだろう。

やはりポテンシャル的には彼女もソルに劣ってはいない。ただ力の扱い方が解っていないだけと、今身を以て理解する事になるようだ。

「バカヤロウ！　エネルギーが拡散できそうもない場所に、あんな法力の塊を当てたら……」

「ん～？　まぁ、ただじゃあ済まないだろうねぇ」
「言ってる場合か！　クソッタレ！」

もはや眼前まで迫った、ジョニー曰くキツーイ一撃に対してソルは即座に法力を練り上げる。即席にして練り上げた法力の量、質ともに先程以上。

いくら量が多かろうと扱いきれなくては意味がない。そういう意味では彼は、間違いなく自由に法力を扱えている。ジョニーにも見て取れた莫大な法力を再び封炎剣に乗せ、今度こそ一気に解き放つ。

「タイランレイブ！！」

暗い空間を染め上げる紅蓮の炎と巨大な光線は、せめぎ合い徐々に外の景色を閉ざしていく。ソルとジョニーを呑み込んでしまったが、当初の予定通り蓋を閉じる事には成功した。

しかし作用反作用の法則に則り、ソルと彼の足を掴んでいたジョニーも、ロケットよろしく反対側へと突き進む。

凄まじい風圧にソルは背中を向く事もできず、ジョニーも片手で足を掴みながら、もう片方の手で飛ばされないように帽子を押さえたまま動けない。

そして後ろから光を感じた時、ソルとジョニーは今度は背中から落下し始めた。

Nの余裕／引きずり込まれた異邦者（後書き）

どうだったでしょうか？

元々僕自身がＧＧ好きなのですが、このサイトにはあまり無い。ならば僕が作ろう。

見切り発車ですが、僕が不慮の事故等で死なない限り作品はしっかり完結させます。ですので長くなるとは思いますが、お付き合いいただけたら嬉しい限りです。

ちなみに各話のタイトルはオマージュです。解る人はニヤッと笑って、アルファベットに入る単語を考えてみてください。

ヒント：サイクロン！　ジョーカー！

ヒントではなく、まんま答えでしたｗｗｗ

Aの溜め息／試験準備、完了！（前書き）

お待たせしました。誰も待っていない？　だとしてもお待たせしました。

不定期と言いながら、冬休みのためにガンガン行かせてもらいました。でも次は長いでしょうね。

今回はムラクモ十三班にスポットを当てました。というよりも今はまだ彼らにしかスポットが当てられません。もう少ししたらGG勢は出てくるでしょうが、たぶん二話ぐらいはかかるんじゃないでしょうか。

とりあえず次のお話も十三班（仮）にスポットが当たる事でしょう。

Aの溜め息／試験準備、完了！

「やれやれ。まったく、どうしてこんな所に来ちまったんだ、俺は……」

背負ったリュックを下に置き、花壇の植え込みに腰を下す青年。先程から口より漏れるのは、ひたすらに億劫な溜め息のみ。溜め息の分だけ幸福は逃げていくと言われるが、幸福が逃げたと言うなら既に逃げられた後だ。

事の発端は二、三時間前に遡る。いつものように秋葉原を散策していた青年は、突如として物々しい服装の男たちに囲まれ、ここ東京都庁前の広場に連れてこられた。

道中、あまりにも車内の空気が重すぎると感じた彼は、軽口の一つでも叩いてやろうかと画策した。しかし言論を一切許さないような異空間に、さすがに黙る以外の選択肢が無かった。

自分空間に引きこもるのが一番と結論付けた彼は、首に掛けてあったヘッドホンを着けて黙り込む。そうする事によって、周りの音がシャットアウトされるため静かな考えができる。

腕を組み、リズムに乗って指を動かす。そんな暇つぶしをしながら周りに目を向けると、自分以外にも一般人が混じっているではないか。とりあえず変な勧誘や宗教関連ではない事だけは想像ついた。

そこで考えるのを止めると、目も瞑る事で彼は眠りに落ちていった。

気が付けば、君達はムラクモに才能を認められただ、選抜試験だ、あげく即席で仲間を組めだと？　馬鹿馬鹿しい。こんな事のために秋葉原からここまで連れてこられた身にもなれってんだ。などと内心では僅かな怒りを抱えていた。

別に辞退しても構わないという事らしい。さて、自分はどうする

か……。

――なのはの初回限定版を買おうと思って軽く出たつもりなのに、こんな所まで来て時間を潰されて。オマケに別に帰ってもいいだと？　だったら最初から呼ぶなよ。つーか俺、メッチャ浮いてんじゃん。

他の選抜者は一般的な服装をしている。恐らく普段着そのままといった所だろう。対して自分はバンダナにヘッドホン、キャラTシャツにリュックと明らかに周囲と一線を画すような服装。これで浮かない方がどうかしている。

唯一の救いは、今日の上着が自分の好きなアニメのヒロインである事、ヒロイン高町なのはが彼の前面を守ってくれている事だろうか。たとえ精神的にダメージを受けようと、彼女が微笑んでくれるのなら自分はどこまでも頑張れる……気がする。

彼女も作中で不屈の闘志で数々の困難を乗り越えるが、その思いは装着者である自分にも伝わるはずだ。

そう考えるだけで、なにやら得も知れぬやる気が体中に漲ってきた。よくよく考えてみれば、たしかにマモノ退治は危険が伴うだろうが、それを補って余りある利益が得られる。特務機関という得体の知れない組織とはいえ、国が資金を賄っているのであれば公務員と変わらないという事だ。

公務員となるためには頭が必要になるが、ただ肉体労働をするだけで楽な人生を送れるようになる。そのチケットが目の前にあるならば、掴まなくては人間じゃない。

男は良くも悪くも考え方が人間らしく、今回もまた実に人間らしい理由でこの試験を受ける事を決意した。

そうなると初めに二人、最低でももう一人パーティーのメンバーが必要になる。所詮は初対面同士、あまり能率などは考えず馬が合

ったら組む程度で構わないだろう。
そこまで考えて周りを見渡した時、一人だけ自分と同じ、それ以上に目立った存在が視界に入った。

しなやかな絹を思わせる銀の髪が腰よりも下まで伸びている。とても手入れが大変そうだが、黒髪しかいないこの場においては何よりも目立つ。肌の色も周囲との相違に拍車をかける。
黄色人種の多い日本人からは考えられない白い肌を、彼女は惜しげもなく晒している。ファーをあしらった豹柄の上着は前面が全く閉じておらず、代わりに紫の水着らしき物で隠すべき所は隠している。
下も似たようなもので、とても短いズボンからやはり水着らしき物が見受けられる。ダメ押しとばかりに紫のニーハイを着用している。太ももが僅かに見えるラインまで持ち上げられたニーハイは、見事な絶対領域を形成している。

――なん……だと……？

彼女との距離が離れているからこそ、ここまで鮮明に脳裏に焼き付ける事ができる。そんな単純な事に、彼は神に感謝した。
上半身はそれで寒くないのかと問いたくなるような薄さだが、明らかに大きな胸と谷間。それらが奏でる二重、いや三重奏はまさに三次元に現れた二次元。彼のような人種が望む理想の降臨、それが彼女だった。
形の整った、見るからに柔らかそうな白山を手に納めてみたいと思ったところで自重した。それをやっては犯罪だ。公務員志望からあっという間に牢獄志望になってしまう。
視線を下にやれば、これまた神掛かった絶対領域。その僅かに見える白い肌に指を這わせたら、一体どんな感触がするのだろうか。きっと肌が指に吸いついてくるに違いない。

今ここで彼女をお目にする事が出来た時点で、彼にとっては今までの憤りなど小さな事だった。

「素晴らしいっ！　人生とは素晴らしいものだっ！」

周りを気にする事なく、男は立ち上がり天に吼えた。この素晴らしい出会いに、それを演出してくれた神にありがとう、そしてありがとう。男は思いの丈を解き放った。

ちなみに急に立ち上がったと思ったら、唐突に吼えだした男を気味悪がるように、既に組み終わったパーティーからエントランスの中に入っていった。

叫び終わった男は納得したように頷くと、さっきまでの勢いが嘘のように頭を抱えて座り込んだ。原因は……言うまでもない。

「やっべぇよ。まじやべぇよ、いきなり叫び出すとか俺マジ変人じゃん。傍から見たらドン引きもんだぞ、今の。ぐおおおお、顔を上げたくねえ！　頼むみんな、早く行ってくれ！　俺はみんなが行ってから一人で行くから！　一人でも全然寂しくないから！　むしろみんなから見られる方が痛くて耐えらんねえ！！」

「あ、あのー……」

「ハイなんでしょうか！！？」

「す、すいません！？」

下を向いたままブツブツと呟いている様子は、より一層異様なものだ。だが一人で調子を上げて捲くし立てるように話す様は、聞いている者に笑いを呼び起こさせるコミカルな口調だった。

それが気になったのだろうか。頭の上から少女の声が聞こえてくると、もはや条件反射とも言える速度で立ち上がり話しかける。

目の前には、いかにも大和撫子といった具合の少女が立っていた。

艶のある黒髪を腰ほどまでストレートに下ろしている。その長い髪の間から窺える瞳は優しげな色を帯び、しかしその中には毅然とした強さが感じられる。
学生服に短いスカート、そして彼女も赤いニーハイを穿いていた。丁度先程の女性と同じ絶対領域は、しかし彼女らしい健康的な色を見せる。腰に下げた刀なんて視界に入らない程の美しさだった。
青年よりも小さな少女は驚いた表情のまま固まっている。来た時から突拍子もない言動を繰り返す事は理解していたが、いざ対面してみると彼女の理解を超えたやりとりの数々。とても彼女の理解が追いつけない。
ゆえに互いが固まる事、数秒。口火を切ったのは青年だった。

「ニーハイGJ（グッジョブ）」
「じ、じーじぇい？」

誰に何と言われようと倒れない神話の英雄になったような清々しさで、青年は力強くグッドサインを出す。彼の中で今日という日は、素晴らしい一日として彼の人生史に刻みこまれた。
しかしそんな良い笑顔を向けられても、彼女には何が何だかさっぱり理解できない。それにGJという言葉も聞いたことがない。
だが目の前の彼が浮かべるのは、とびっきりの笑顔。どんな反応をすれば正解なのか分からず、対応に困った彼女が取った手段は苦笑だった。

「んで？　いったい何の用かな？」
「え、えーっと、ね？　ずいぶん暇そうだな～と思ってね？」
「……嫌味か」

自暴自棄な笑みを浮かべ、再び目線が宙を彷徨う。一旦は持ちこたえたが、やはり豆腐並の防御力しかない精神では彼女の質問に耐

えられそうにない。
なんというか彼女は雰囲気から読み取れるように、誰にでも優しい気持ちで接しているのだろう。
暗いという訳ではないが、疚(やま)しい気持ちがあると自らの気持ちによって自然と懺悔する事になるだろう。使い古された表現だが、聖母のような存在に似ている。
そんな聖母はまたも困った表情で、彼の言葉を否定するため首を振る。

「違う違う！　だから、その……私達と組みませんか、なんて……」

あはは、と軽く笑いながら少女が訊く。だが青年にしては、彼女の提案は願ってもない好機だった。
客観的に見ても自分は奇行が多かった。昔よりは良くなったが、今も同じような事をしているからこその今の状況。そんな自分に声をかけるとなれば、余程の物好きか自分と同じような人種なのだろう。
どうせ一人で行く予定だったのだ。今更一人増えようが全然問題は無い。

「ああ、良いぜ。俺も一人で行く予定だったから、むしろありがたいよ」
「良かった〜。断られたらどうしようかと思ってたから」

了承の意を伝えると、彼女は笑った。それはもう素晴らしいほどの明るい笑顔だった。水をやるととても綺麗に咲く花、それが彼女だ。
その笑顔は今度は彼の心を優しく溶かした。彼女の笑顔に釣られて、彼もなんだか嬉しくなってきた。きっと今の自分は、気持ち悪いほどの良い笑顔を浮かべているんだろう。

置いていたリュックを背負うとバンダナの位置を整える。ここから彼女との楽しい仕事が始まるのだろう。そう考えるだけで、やはり顔が綻ぶのを止める事ができない。

「さ、行こうぜ？」
「うん。それじゃあ行こっか。エミー！　行くよー！」
「そうだ、行くぞエミー！　って誰！？　え、誰か他にいるの！？」

意気揚々とエントランスに向かおうとした時、彼女が誰かに呼びかけた。
困惑の表情を浮かべるのは、当然の如く青年だ。二人だけではなかったのではないか？
片手を上にあげてブンブン振る。エミーという少女に呼び掛けているのだろう。気になった青年も彼女が向いている方を向くと、その先には件の女性が歩み寄っていた。

「見つかったの？」
「うん。優しい人だから一緒に来てもいいって」
「ふーん。ま、カナミが決めたのなら誰でも良いけどね」

それは自分以上に浮いた服装をしていた女性だった。近くで見ると殊更、触れたら気持ちよさそうな彼女の肌が目に痛い。
並んでみると自分とは頭半分ぐらいしか背丈が変わらない。平均より少し大きい自分と大差ない彼女は、女性の中でも相当大きな部類に入るだろう。むしろカナミと呼ばれた彼女の方が平均だろう。
彼女はカナミに近寄ると、よくやったと労うように黒髪に手を乗せて優しく撫でる。冷めた雰囲気に反して、とても温かさに満ちた仕草。
青年から表情は窺えないが、おそらく彼女は嬉しそうに顔を緩めているのだろう。しかしそれを悟らせないような口調で僅かばかり

反抗する。

「も、もう。私も子供じゃないんだから……」
「じゃあ、もうやらなくてもいい？」
「……っ、今度……ゆっくりしてほしい……」

軽い脅しだろう。エミーが手を止めると、カナミは物足りなかったのか、下を向いて懇願するような口調で呟く。
それで満足したらしく、エミーはとても軽く頭を叩くと手を下す。それから今度は男に目を向ける。彼も彼で、彼女に対して諸々の感想を胸中で述べたその直後に接触するとは、夢にも思わなかった。
だから彼女が青年に歩いてきた時、訳もなく目を瞑った。心中を知る事など仙人や妖怪サトリでもない限り不可能だが、それでも後ろめたい感想を浮かべていた彼には耐えられなかった。
淀みなく足音が近づき、自分の目の前で音が止む。その直後に来るであろう衝撃に備えて、男は身を固くしていた。
だがいつまで待っても衝撃などは来ず、代わりに頭に彼女の物であろう手が乗せられた。

「……え？」

別に疚しい事などしていないのだから、そこまで恐れる事など何も無い。だがそれにしてもこの感触は一体なんなんだ？
不思議な状況が理解できず恐る恐る目を開くと、目の前一杯に白く輝く二つの山が広がっていた。

「な、なにをしているのでしょうか？」

目の前にあるのであれば見えてしまうのは仕方ない。というかむしろずっと見ていたい。でもバレたらどうしよう。しかしとても大

きて柔らかそうな胸だな。てかこれ何てイベント？
頭の中には様々な言葉が渦巻いているが、ようやく口に出せたのはたどたどしい言葉だった。言葉を覚えたばかりの赤子でさえ、もう少しまともに喋れるのではないか。
背伸びまでして彼の頭にも手を置いているエミーは、不思議そうに彼を見る。一体何を言っているんだと。質問した自分こそがおかしい、そんな雰囲気だ。

「何って、見てわからないのか？」
「いや何をしているかは分かったんだけど、されている意味が分らないかな～なんて」
「ああ、私にも分らない。なぜなら特にこれといって理由は無いからだ」
「……はあ？」

ビクビクと少し震えて口にした青年に対して、しかしエミーは自分も分らないと答えた。その回答の不可思議さ、そもそもこの問答事態の意味の無さに一瞬だけ、彼の脳内が空白になる。
だったらこの女性は、初対面の異性に対して何の警戒心すら無くスキンシップを試みてきた事になるのではないか。多分彼女は外国人だろうから、ボディーランゲージが積極的に見えても不思議じゃない……のだろう。

「なんとなく撫でたくなった。だから初対面でも気にしなかった。これが理由じゃダメか？」

彼女の発言からしても、やはり自分の行動の不審点が理解できていない事は明らかだ。もしかしたら、自分が異性に手を出せない人畜無害に見えているのかもしれない。何かと得する先入観ではあるが、ある意味男としての沽券に関わる。

いつか手を出して、自分は男なのだと認識させなくてはならないと彼は密かに誓った。
その誓いを揺らがせるかのように、カナミが申し訳なさそうに頭を下げる。

「ごめんなさい。彼女、自分の容姿を気にしない行動が多いから、今みたいな感じで触ってくるんだけどね。それは貴方の事をある程度、信頼した上での事だから。つまり彼女なりの挨拶にあたるのかな？」
「挨拶、ねえ……。君も苦労してるんだね」
「あはは……まあ、それなりにね……」

二人の男女は納得したように頷いている。この短いやりとりだけで、エミーの保護者みないなものがカナミだと、なんとなくで把握できた青年であった。間に挟まれた彼女は二人が何に対して苦笑しているのか理解できず、ぼんやりした表情で二人の顔を見比べている。
と、ここで二つばかり大事な事に気がついた。そこで今度はお返しとばかりに青年もエミーの頭に手を置く。
傍目から見れば彼の仕草は普通に見えたが、実は度重なる葛藤と結局はダメ元で、といったヘタレ思考の末の行動だった。無論、そんな事を口に出すほど彼も初心ではない。
案の定、サラサラとした肌触りの銀髪が掌を軽く刺激する。その手を不思議そうに見つめながら、エミーは青年を見上げる。といってもそこまで身長差があるわけではないので、見上げるとは言わないだろうが。

「すっかり忘れてるところだった。仲間になったことだし、名前を知らなきゃお互い困るだろ？」
「そうだね。名前があった方が親しみも込められるし。私は秋谷華

波。カナミってよく呼ばれるけど好きに呼んでいいよ。……あと、これは言うべきなのかな？　ここに来た時にムラクモ機関からサムライって言われたんだけど」

最後の方は困惑しながらも、とても聞き取りやすい口調で黒髪の少女は名乗った。

既に彼女達のやりとりで青年も名前だけは把握していたが、名前とは本人から教えられてようやく本当の意味をなす。故に初対面同士は極力、名前が解っていても許可なく呼ぶべきではないだろう。

そしてもう一つ、この場に連れてこられた際、参加者は一人残らず何かしらのコードネームであろう呼称を言いつけられている。青年も類別されたが、それ以降周囲に聞き耳を立てていると五種類ほどあることが分かった。

サムライ。トリックスター。デストロイヤー。サイキック。ハッカー。

彼が見ていた限りサムライ、トリックスターと呼ばれた者が最も多く、次いでデストロイヤーと呼ばれた者が前者よりも少なかった。それでもそこそこの人数はいた。

だがハッカーと、とりわけサイキックと呼ばれた者は二つ合わせても五人にも満たなかった。内容から察するにサイキックというと念動力などの、いわゆる超能力という部類だろう。

そんな人物がいる時点ですごい事だが、なによりすごいのは超常の能力持ち達を集められる彼らの情報網だろう。いったい彼らのネットワークというのはどのような形で、どこに潜み、どこから見つけているのだろうか？　そんなネット関連の事を考えると、思わず彼の腕が疼くのはしかたない。

もちろん彼は――

「それなら俺も言われたぜ？　ハッカーだってさ。俺は岡田荒也、

アレヤって呼んでくれ」
「たしかハッカーってあんまりいなかった気がするけど」
「君も盗聴してた口か。俺のカウントが正しいなら、サイキック込みで五人にも満たなかった。ま、気楽にやらせてもらうよ」

青年、アレヤは軽い口調で気負う事なく言う。ある意味、選ばれた人種と勘違いしてしまいかねない希少種としての判は、しかし彼にとっては鬱陶しい以外の何物でもない。
彼はアニメやゲームに深く傾倒しすぎた為に、常人より少しばかり機械関連に詳しくなってしまっただけだ。だから他人から珍しいと思われようと、認めこそすれ驕りはしない。そんな事、いろいろ損しているに決まっている。
ふうと溜め息を吐き、今度は目の前にいる手を置いた女性に目を向けるが、そこでカナミが苦笑する。

「盗聴って、私はそんな事はしませんよ」
「カナミ、盗聴はダメだよ。聴くなら堂々と聴かないと」
「ええっ！？　私はそんな事しないってエミーなら知ってるでしょ！」
「そうだ！　まったく最近の若者は、面と向かって物も言えないから困りますな～、まったく！」
「貴方も若者でしょ！　しかも先に盗聴したのは貴方だし！　そしていつの間に口髭なんて生やしたんですか！」

手を下したアレヤの口元にはふさふさの白い髭が着けられている。疑問なのは、はたしていつ装着したのだろうかという事。それに乗っかるようにエミーもボケ倒してくる。
悪ノリする形でアレヤとエミーの二人掛かりで攻め立てるも、しかし彼らのボケを即座、かつ的確に捌いていくカナミ。会って間もない人間が、照らし合わせたように間断なくボケを繰り出せるだろ

うか？
たったこれだけのやりとりで、なぜだかこのメンバー内での立ち位置が見えてしまったのは、おそらく気のせいではない。アレヤとエミーも互いに顔を見合わせると、徐に手を出し握り合う。条約締結もかくやというガッチリとした握手だった。

「君とは仲良くやれそうだよ」
「そうだな。初対面でここまで息があうなんて珍しい」
「うう、なんで早くも弄られる体系が出来上がってるの～……」

三人パーティーの内二人が敵に回るのであれば、一人側に勝ち目はない。
エミルにはよく弄られるが、今度はアレヤも加わるのかと思うと少し気を落とした表情でカナミが項垂れる。だが彼女を放って二人の話は進んでいく。

「私はエミル・ベイカット。カナミはエミーって呼ぶけど、家族や本当に親しい人以外が呼んだら靴の裏を見せている。ムラクモからはトリックスターって言われた。とりあえずよろしく」

靴の裏を見せている。つまり彼女の許可なく、勝手にあだ名で呼んだら蹴りが飛んでくるらしい。こんな華奢に見える体でそこまで威力が出るとは思えないが、それでも蹴られて快感を覚えるような特殊性癖は、幸か不幸かアレヤには存在しない。

――とりあえず気をつけておいた方が良いな。

エミー改めエミルの自己紹介も終わったところで、崩れていたカナミが復活した。どうやらなんだかんだで踏ん切りは着いたらしい。
アレヤがバンダナの上から覗く髪をかく。トントン拍子で人数が

揃った事で、自分達も正式な参加資格を手に入れたわけだ。しかも三人の仲が良いのは予想外だった。
これから刺激的な生活が始まる。そう考えると自分がゲームの主人公になったみたいで、胸が躍るのを止められない。
拳を掌に打ち合わせ、彼なりのやる気を表す。目指す先は東京都庁、その上階だろうか。

「っしゃ。そんじゃあ行きますか」
「うん！　みんなで頑張ろうね！」
「メンドくさいのは嫌いだけど、カナミが行くなら私はどこまでも行くよ」

一癖も二癖もある最後のパーティーは結成し、広場から参加者がいなくなった。
風が吹く。上空から、建物の隙間から流れこむ緩やかな風。それに乗ってオレンジ色の花が舞い始めたが、そんな些細な事には誰も気付かない……。

Aの溜め息／試験準備、完了！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

自分の書き方は携帯で見る分にはとても見辛いでしょうから、そう思いましたらパソコンで目を通してください。

僕自身がパソコンで書きながら、句点二つで改行を心がけているので、一段落が長くなる事はあまりありません。長い場合は意味的に繋げたい場合のみです。

逆に言えば句点一つで改行もあまり無いということですね。たぶんその書き方が読みづらさに拍車をかけているのではないでしょうか。

では内容をば。

このパーティー構成は私の第二ファイルの物です。名前は良く考えたつもりでしたが、エミルとエメルがとても間違いやすい。

名前を決定した時点で違和感がありましたが、プロローグをやっていて気付かされました。二人が一緒に出てくる場合は混乱しないよう丁寧に書いていきたいです。

さて、彼らの容姿については作中で触れたので、読み取っていただければ幸いです。しかし中の人まで理解できた方はいらっしゃいましたか？

解る方には解ったでしょうが、何分僕自身がキャラのセリフを把握しきれていない。そのため妄想と空想を掻き立てて、頑張っておりますｗｗ

一応、彼らの中の人、そして僕が知っている他のキャラを上げてみます。声優さんについては詳しいつもりですが、その詳しさにも

偏りがあるためご了承ください。

・ハッカー　ＣＶ：杉田智和
　ｅｘ）ラグナ・ザ・ブラッドエッジ、坂田銀時、クロノ・ハラオウン、シン

・サムライ　ＣＶ：水樹奈々
　ｅｘ）フェイト＝Ｔ＝ハラオウン、コレット・ブルーネル、更衣小夜、アロイス＝トランシー

・トリックスター　ＣＶ：ゆかな
　ｅｘ）セシリア・オルコット、リィンフォース？、怪人メズール、キュアホワイト

残り少ない正月休み、みなさま有意義にお過ごしください。僕も終わっていない課題を終わらせ次第、遊び倒させていただきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0583ba/

意志持ちて神すら穿つ

2012年1月5日01時50分発行